

テニス競技における性格とプレースタイルの関連性について

浅田 芳樹 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 植田 実

キーワード：テニス、性格、プレースタイル、攻撃型、守備型、併用型、関連性

1. 緒言

テニスにおける時代の流れの中で、ラケットの変遷と共に進化が著しい。それに合わせ、プレースタイルも変化し、それぞれのコートサーフェスによって異なる。

先行研究で、攻撃型、守備型、双方を合わせた併用型（山田幸雄、徳田潤子、1989年）と三つのプレースタイルに分類されている。

筆者自身テニスをプレーする中で、選手の性格がプレースタイルの確立に関係していると考え、「性格」とその選手が行っている（目指している）「プレースタイル」はいかに関連しているか興味を持った。得られた結果により、選手に対して、手助けとなるコーチングを行う事が本研究の狙いである。

2. 研究方法

アンケート調査。

プレースタイルに関して、設問に対する答えを得点化し、それぞれのプレースタイルで群分けする。（A群：サーブ&ボレー、B群：ベースライナー、C群：オールラウンド）また、「攻め方」に関する質問を2問設け、「粘り」との関連性を調査する。

性格に関して、EQS検査法を用いた。

対象者はびわこ成蹊スポーツ大学テニス部25名。一般試合参加選手25名とする。

3. 結果および考察

A群において差異はなかった。B群では「配慮」の因子において高得点者が多かった。これは、ベースライナーは他群と比較すると、返球の時間に余裕があり、次の球を予測してラリーをする事が「配慮」とつながる事から

高いと考えられる。次にC群では、「適応性」の得点において、顕著な結果が得られた。オールラウンダーはあらゆる場面で相手に対応する事が必要であると考え、不可欠な能力である。

その他にも、「粘り」の因子の得点が全体を通し最も高く、「人づき合い」の因子が最も低かった。「粘り」と「攻め方」に関して、差異は見受けられなかった。これは、「粘り」の得点の高低ではなく、競技歴、指導者の考え方など他の要因が影響していると考えられる。

4. まとめ

今回の研究により、いくつかの結果を得ることが出来た。その中で、「粘り」の因子の得点が高く、「人づき合い」が低い事に関して、ラケットの進化と同様にパソコン、携帯などの発展と共に情報化社会が進み、対人ではなく、対物（機械）である現代社会が生み出した結果ではないだろうか。

「性格」と「プレースタイル」において、大きな差異が現れず、関連性について明確にする事が出来なかった。今後、年齢、性別、競技歴など細かい設定を設けることで、より明確な研究結果が得られる可能性があるので課題としたい。

参考文献

- 1) 内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子（2001）「EQS検査用紙」.
- 2) 山田幸雄、徳田潤子（1989）「テニスにおけるプレースタイルとその特徴に関する調査研究」,大学体育研究, 11:39-56.